

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 9 日現在

機関番号：16201

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520546

研究課題名(和文) 特異な文法化過程を経た英語進行形構造の文法化確立要因に関する認知意味論的記述研究

研究課題名(英文) Observations on the Grammaticalization Paths of Progressive Aspect in the Late Modern English Period on the basis of Cognitive and Historical Linguistics

研究代表者

永尾 智 (Nagao, Satoshi)

香川大学・教育学部・准教授

研究者番号：30294739

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、後期近代英語期に一般化した文法構造である「進行形」について、その文法化プロセスを、「アスペクト」の構文的成立要因と語彙的成立要因の相互関係から導き出そうとする研究である。動詞体系と構文形成要素を整理してみると、進行形構造が自動詞構造から他動詞構造へ拡張していった様子を見ることができた。自ら後期近代英語コーパスを作成する計画は十分に進まなかったため、ヘルシンキコーパスと英訳聖書をデータとした小規模観察になってしまったものの、その中でもそのようなことが観察できた。観察結果の一部を、著書『近代英語考』としてまとめた。

研究成果の概要(英文)：This study is on the grammaticalization paths of Early & Late Modern English progressive forms, the usage of which is said to be established in as late as the Present-Day English Period. From the perspectives of Cognitive Linguistics and English Historical Linguistics, the paths are characterized both by structural and semantic factors and by lexical factors forming the progressive constructions. Observations on the functional classification of verbs and on formative factors of constructions show expanding productivity of English progressive forms: from intransitive to transitive constructions. The data are driven mainly from the Helsinki Corpus and Bible English. It was a plan to make Late Modern English Corpus by myself, but did not come true, which made this study a smaller observation than I expected. Parts of the results of this study were compiled in the book "Studies on Modern English" written in Japanese.

研究分野：英語学(英語史)

キーワード：英語史 文法化 構文文法 認知文法 アスペクト 近代英語

## 1. 研究開始当初の背景

英語史研究における実証的研究と理論的研究は、記述目標とアプローチを異にする、独立した研究と捉えられてきた。しかし近年進展している文法化研究においては、両者はそれぞれ微視的記述法、巨視的記述法という相互補完的な見方として位置づけられ、両者を融合した研究の必要性が見えてきている。それを進行形構造の文法化現象の中で確かめてみたいというのが、本研究の背景である。

英語の進行形構造は、初期近代英語期に突如として現代英語の慣用に到達し、19世紀に使用頻度が高まるという、特異な通時的文法化過程を示す構造である。

進行形構造の文法化過程に関する研究で最も重要な研究の一つに Strang (1982) (“Some Aspects of the History of the BE+ING Construction”)がある。これは、散文の世紀の文芸作品を題材に進行形構造が一般化する過程を統計的手法を用いて記述し、口語的文体特性を特徴とする Jane Austen 作品群を境に当該構造の一般化が進んだと結論づけた。しかし未だ、文法化過程の核心 なぜ特異な文法化過程を経たのか が十分に説明されていない。

更に、現代英語でもその出現率が動詞句全体の 3~5%に過ぎない進行形構造(Quirk et al (1985)等)の文法化過程については、「話しことばの律動」や「ジャンル(文体, テキストタイプ)の違い」といった言語要因を抜きにしては考えられない。例えば、初期近代英語期の非文芸散文に見られる標準化現象を扱った Rissanen (2000) (“Standardisation and the Language of Early Statutes”)では、非文芸作品で標準化過程が文芸散文に先んじて変化すること (e.g. 複合否定の早期消滅) や、文芸散文を観察対象とした研究では標準化項目として高位に上がらないもの (e.g. hereby 等の複合副詞) が非文芸散文で顕著に見られることが示されている。

## 2. 研究の目的

初期近代英語期の進行形構造の文法化過程を非文芸散文を対象とした研究を通して、17世紀における進行形構造の拡がりや緩慢であり、出現する本動詞の多様性が極めて低いことがわかってきた。同時に、アスペクト特性を共時的・通時的に考える上で、進行形構造と通常形式構造との比較が必要であることが分かった。この研究を文法化研究として更に展開していくためには、進行形構造を成立させる構文的・語彙的要素を明らかにしていく必要がある。本応募研究は、近年注目されている構文文法論と語彙意味論のアスペクト観を取り入れて、進行形構造の文法化について、その完了期である後期近代英語期における一般化プロセスを見直すこと、そこまで至らずとも、その端緒を見いだすことが目的である。これは、進行形構造の一般化に

とって重要な作家・作品を提示しながらも、文法化過程が進んだ原因を十分に説明できなかった Strang (1982)を一歩進める研究となる可能性がある。

実証的英語史研究法と認知意味論(なかでも構文文法と語彙意味論)のアスペクト観に沿って進行形構造の構文的要因と語彙的要因を取り出し、双方の見方を融合して後期近代英語期における未完了相の完成プロセスを検討するものである。これによって、通時的に見て特異な文法化過程を示した進行形構造の慣用到達から一般化までに200年余を要した原因を考え、後期近代英語期における文法化完了過程の再考を図るための端緒を見いだすことが、本研究の目的である。

## 3. 研究の方法

計画段階では、以下の方法による3段階のプロセスを経る継続研究を想定した。

### 第1段階

まず、微視的記述法を使った進行形構造における代表的研究である次の5点の精査をする。具体的には、Scheffer (1975), Strang (1982), Rissanen (1999) (“Syntax” in *CHEL* vol. 3)および Denison (1998) (“Syntax” in *CHEL* vol. 4), 末松 (2004) (『ジェイン・オースティンの英語』)の5点である。初年度は、まず、これらの研究でとられているアプローチを整理し、進行形構造にあらわれる動詞の体系的な整理が十分にできなかった永尾 (2007-11)の研究結果を再確認する。必要な視点・方法を明確にしながらその精密化を図る。動詞の分類には、Levin (1993) *English Verb Classes Alternations* を利用する。

動詞体系の整理と表裏関係にある進行形構造形成要素には、動詞の種類とそれらの文中での機能、動詞の頻度、主節・従属節における出現度差、主語の動作主性、共起語(特に、時の副詞句等の出現状況)、文脈特性(口語性、文語性の区別等)等が考えられる。要因を明示、補充しながら、Strang (1982)で使用された Austen 作品、*Early Modern Women's Writing* の調査結果を再吟味する。Strang (1982)では、30,000語中100回の出現を高頻度としていたが、この見方の適性を検討し、検証に生かす。

一方で、第1段階では、ウェブ版電子テキストを使って18-19世紀資料の作成を開始する。素材テキストは、Project Gutenberg、名古屋大学 松岡研究室、Google Books のウェブ・サイトから取り寄せ、必要な加工を加えながら作成する。Strang (1982)では、各作品5,000語を目途にコーパスを作成したが、この見方の適性について検討し、必要な定義を行い、将来的なコーパス作成に生かすヒントを見いだす。

## 第2段階

構文文法論と語彙意味論は、意味を重視した記述法をとることから、近年の文法研究、文法項目の通時的考察で応用がすすんできている。文内要素の特性や機能を常に文の中で位置付ける構文文法論の観点と、例えば進行形や受動態の特性や機能を be 動詞の特性・意味機能の一部に組み込ませる記述法を取る語彙意味論の観点は、Jespersen (1909-49)や Visser (1963-73)でみられた直観的判断を背景とした曖昧な記述説明を形式化することに成功している。本応募研究でも2つの方法論、特にそのアスペクト観を使って、進行形構造の構文的要因、語彙的要因を提示し、文法化過程の全体像を視野に入れた体系的記述を目指したい。ファジィ性、段階性、プロトタイプ特性、助動詞化、反助動詞化、主観化、反主観化等の概念を使って、進行形構造と通常形式構造との比較に重層的説明を加え、進行形構造の文法化プロセスの記述を図りたい。必要に応じて、他の迂言構造や、動名詞、受動態等の関連構文との関連も考えながら、Jane Austen 作品、*Early Modern Women's Writing*を再吟味する。

特に独自コーパスの作成については、十分な分量のコーパスを作成できない場合が懸念されるが、そのような場合には、欧米で作成されている後期近代英語コーパスの利用を図ることとする。

## 第3段階

第2段階までの考察を踏まえて、18-19世紀コーパスから抽出される検索結果に対して、構文的・語彙的文法化要因の導出を図る。これらの観察を通して、進行形構造の文法化過程を、語彙的位置づけから文法的位置づけへの未完了相の変化と調和できるのか否かを検討する。全体を通して、進行形構造の文法化の完成期である18-19世紀における一般化プロセスの再考を図ることになる。

## 研究方法の修正

本研究を進める中で、第1段階では英語史的観点からの代表的研究の渉猟と観察に多くの時間を要した。また、第2段階では認知文法における構文構築プロセスの習得に多くの時間を要した。これらにより、後期近代英語の独自コーパス作成が進まなかったため、これに対応するため、実際に使用したコーパスは Helsinki Corpus 等の ICAME Corpus、*Early Modern Women's Writings*、各時代の英訳聖書の対照観察によって代替することとした。

## 4. 研究成果

本研究の問題意識は、伝統的な手法・論法に依拠する英語史研究において意味研究をどのように発展させていくかを考えるとき、理論的研究との接点をどのように措定して

いくかを考えなければ、いつまでたっても意味の世界に入り込めないのではないかと、という点にある。2つの手法の接点について明らかになったことを、以下で簡単に説明する。研究内の具体的事象説明は、拙著『近代英語考』に提示している。

Scheffer (1975), Strang (1982), Denison (1998), Rissanen (1999), 末松 (2004)の英語史的観点に立つ諸研究からは、明示的表出事項は示されるものの、実証性に現れてこない構成要因が全く現れてこないことを再確認することが出来た。

Strang (1982)は Jane Austen 作品における英語の状況が現代英語の言語特性を極めて高く示しているとし、末松 (2004)はそのような Jane Austen 作品の文法集成であるが、進行形構造の扱いが小さい。このことは、進行形構造の扱いの困難さを示している。使用したコーパスからは、Quirk et al (1985)にもあるように、進行形構造は現代英語コーパスにおいてさえ、口語性の高い文脈での出現が多く、全コーパスデータ内の3~5%程度の出現率に留まる出現率であることから、文献データを中心とした観察においては、そのような希少性を改めて再確認することとなった。

動詞の特性分類を行うにあたって、Quirk et al (1985:SS4.72)が「動詞の意味を分類するというのは極めて人工的なモノであり、例えば write という動詞をこの1語だけを見て分類しようとしても分類できない。」としているように、意味論的観察、語用論的観察、構文文法的観察等、文脈依存的に分析しなければ動詞の意味を捉えることは難しい。同様に、進行形構造についても、文脈依存的観察眼が求められるわけであるが、例えば、友澤 (2002)では、概念主義的意味観によって事態概念を捉え、「非完結的事態概念」、「視界枠」、「視点局所化」という道具立てによる進行形の説明を図っている。仮に、現代英語の進行形がこれらの道具立てによって分析できることを認めるにしても、近代英語期全体における進行形の定着プロセスの前段階をこの方法論で説明することは困難である。進行形の成立過程を考えると、まさに、こうした点をどう解決するかということに他ならない。

一方、記述文法における進行形の文法記述は、進行形の形式的プロトタイプを命じすることはできるものの、諸用法の列挙と、例外的事例の排他処理という説明方法をとることによって記述を図ろうとしている。意味の全体像を捉えるために諸用法を網羅的に扱ってはいても、用法観の相互関係は不分明となり、本質論と周辺論の境界線が見えてこない。

本研究の第2段階で考察した、概念主義的意味観に基づく文法記述では、ネットワークモデル等を使って全体記述を行う。言語形式が内包する外界解釈のあり方を記述に多く

取り込み、意味に重点を置いた記述姿勢は、全体記述と用法観の相互関連の記述を主目的とする点で、本研究の視点と合致する。

英語史における語彙、文法形式の諸変化を現代からさかのぼって眺めるとき、何れの変化においてもその背後に存在する、人間の外界解釈のあり方が関わってくることを無視することは出来ない。英語史記述においても、全体記述を志向した意味観に基づいた記述もあってしかるべきものである。また、概念主義の意味観を認めようとするれば、その証左として歴史的变化を説明することも欠かせないはずである。概念主義の意味観と歴史言語学の融合を志向するとき、英文法における検討課題も多々あるが、進行形構造はそのような問題の一つに挙げられるものである。

本研究では、独自コーパスの開発に至らなかったために、既存のデータを使って観察するに留まってしまった。今後の研究では、そのような独自コーパスを構築し、より大きなデータ集成の中で見えてくる動詞システムを押さえた考察を続けていくことによって、限定的観察に終わってしまった本研究のついで研究を続けていきたい。

なお、本研究の結果の一部は、以下の第5節に示す論文、著書に示すことが出来た。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

永尾智 (2014) 「進行形の意味構造に関する認知文法の思考法」『英語と英文学と：田村道美先生退職記念論文集』, 香川大学教育学部英語教育講座刊, pp. 109-118 .(査読無)

〔図書〕(計1件)

永尾智 (2015) 『近代英語考：未来助動詞と進行形に関する考察』, 一粒書房, 252 pp.

## 6. 研究組織

(1)研究代表者

永尾 智 (NAGAO SATOSHI)

香川大学・教育学部・准教授

研究者番号：30294739